The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	縄文式土器の機能と形態
Author(s)	森, 淳
Citation	デザイン理論. 1967, 6, p. 40-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

縄文土器の機能と形態

森　　淳

縄文式土器の形式と編年の研究は、現在までに多くの考古学者達の手によって行われて来たが、デザイン担当者によるデザイン面からの研究は、あまりなされなかったように思われる。

縄文式土器も亦現代の生活用具同様、生活のための具としての性格をもって造られたものである以上、考古学上の形式や編年の研究のみならず、デザインとしての面からの研究もなされるべきであろう。

また、縄文式土器が生活用具として発達してきたものであるとすれば、その発達の過程にあって、当然その当時の人々のビジョンによる造形と意匠がなされたとみるべきではなかろうか。そしてまた近代デザインが、各々の時代的背景をひかえて必然として現われる現象であることを考える時、縄文式土器にも当然その時代の背景と、生活からの要求による器形の変化と、文様の推移とが必然的に現出したと思われるのである。

早期縄文式土器にみられる尖底の不安定な器形から出発した縄文式土器が、前期縄文式土器になると、平底の器形をもつことによって安定性を獲得し、また形態も深鉢形はもとより浅鉢形または甕形と変化して行ったことは、とりもなおさず機能面からの追究がなされたものであるとみなければなるまい。つまり食物の貯蔵具、煮沸具としての機能や呪術による精神的な面からも当然フォルムの追究がなされ、形態を変化させたと思われるのである。

この場合、粘土のもつ自由な可塑性と、粘土紐の発見によって駆使することができた造形上の可能性とともに、材質がもつ特性もまた考慮しなければならないが、形態の発展は単に機能面での追究がなされたということのみならず、この時代の人々が持つことができた唯一の造形可塑材であったことから、当然呪術信仰などから高まった芸術的造形意欲が、機能や実用を超えた形態や文様の出現を促したものと思えるのである。

このことは特に中期縄文式土器の表面や口縁部にみられるような蛇身文様、顔面、宙空に舞い上るような複雑な突起、意味あり気な把手などからも観察される造形衝動がそれで、これらの表現は呪術の発達にともなって出現したものであり、そのために器形そのものの機能を超えた意欲的な造形が行われたのであろうと考えられる。 註）写真参照 fig. 1

しかしそれらの器物表面や、口縁部に現われてきた複雑な突起を含む立体的な文様も、中期以後になって、土偶、土面その他呪術からの要請で造形されたであろうと推定される器物の出現とともに、それ以降次第に器物の表面から姿をひそめ、遂には平面的な単純化された文様に推移し、それとともに器形自体のフォルムも洗練されて単純な形態に発展して行ったと考えられる。

後期になると、更に生活の様式が複雑化し、また食生活も発展するに従って新しい器物が現われた。

例えばこの期になって出現した注口土器などがその好例といえよう、これは酒類などのような液体状のものが食生活に加えられたことを示し、また注口土器の形態は、現在の土瓶の原形をなすものとして注目に価するものである。

註）写真参照 fig. 2

一般に食器や割烹具などと思われる容器のフォルムは、このような食生活と密接なつながりを持ち、食餌の拡がりにともなって、それの用に適うための発達をみるものである。

縄文式土器の発達過程も、このように考えてみると、各時代の食生活の影響

や、呪術信仰による世界観の違いなどが様式化されたものと考えられる。

縄文式土器の発展過程について以上のように考えるが、このうち特にこの稿では、煮沸具についてその形態と機能との関係を考察してみたいと思う。

煮沸具としてのフォルムの変化は、食物と密接なつながりをもちながら発達したであろうことは先に述べたが、単に食物と器のみならず、炉と器の関係をも考慮しながらそれらの発達を考察してみる必要もあろう。

縄文文化時代早期に出現した深鉢形の形態は、当時の貝塚から発見される多くの大形二枚貝の縁に、傷がついたものはほとんど見当らず、無理にこじあけてむきみにしたような形跡も留めないことなどから、この時代の土器の形態は、貝をゆでることを目的とした機能がフォルム形成の要因となったといえるのではなかろうか。つまり実質的な貝の身をとるためには、その何倍もの穀と共にゆでなければならず、そのために口の拡がった深鉢形の合理的な形態が案出されたとも考えられる。（注2）

なお横須賀市夏島貝塚からこのような深鉢形の煮沸具が発見された時の状況からみてもこのことが類推される。

即ち夏島貝塚において発見された炉趾の状態は、故意に平坦にされたと思われるローム層の上面1.5×0.7mの範囲に握りこぶし大の礫群を敷きつめ、礫群に接した西側には灰のかたまりが半円形に残され、さらにその西側には木炭を含む灰にかこまれた焼土が楕円形に推積し、その南東側からほぼ1個分の深鉢形土器の破片がかたまって発見された。また、この出土した土器の胴より下には煤が付着していたことや、焼けて変色した礫が発見された状態などから考察すると、この深鉢は炉のかたわらに突差して直立させ、煮炊きしたことを暗示している。特に尖底の部分が直立した状態で発見されたことからも、使用の状態を示唆していると思われる。（注3）

これらの事実は、早期尖底土器の形態が、当時主要食糧として採集された貝

類を煮るために案出された合理的なフォルムであったことを示し、また不安定な尖底も当時の炉趾から推測すると、可成り合理的なものであったと思われる。

ところで早期における炉趾は、右の夏島貝塚のような単純な焚火形式の外に、浅く堀られた穴状のものも存在する。例えば南関東の茅山式土器を出土する遺跡では、長径1m、短径0.6mローム層を30—40cm堀込んだ長楕円形の穴が発見され、この穴の底面は長径の1方にゆるやかに傾斜し、底面には10cm内外の焼土や灰の推積があることから、明らかに炉趾であることが証明される。(注4)

このような炉で煮炊きすることを考慮して煮沸具の加熱面積を広くするためと、貝を容易に出し入れするために上部を拡げ、直立させるためには尖底を採用したのではあるまいか。特にこのような炉形にあっては、円推形尖底土器の形態は、直立させるためと可熱面積を広くするためには、最も適した器形の煮沸具であったと思われる。

前期になると、長野県神の木遺跡出土の土器のように、底部が小さな平底状をなし、胴の上半部が大きく張り出した器形が出現し、遂には平底土器に転換してゆく。

またこの時代になると、円筒形平底深鉢のヴァリエーションともみられる栃木県野渡貝塚出土の黒浜式土器のように、頭部がくびれた深鉢や、その他用途も煮沸用土器からさらに容器として使用される皿状の丈の低い浅鉢なども出現するようになった。

このことから考えると、尖底深鉢のみであった早期縄文式土器の形態が、しだいに生活の進展にともなって、機能を満たす方向へと発展して行ったと思われる。

煮沸用土器の形態も、早期の円推形尖底深鉢から砲弾形尖底深鉢、円筒形平底深鉢としだいに煮炊きに便利な器形へと変化していった。

註）写真参照 fig. 3, fig. 4, fig. 5

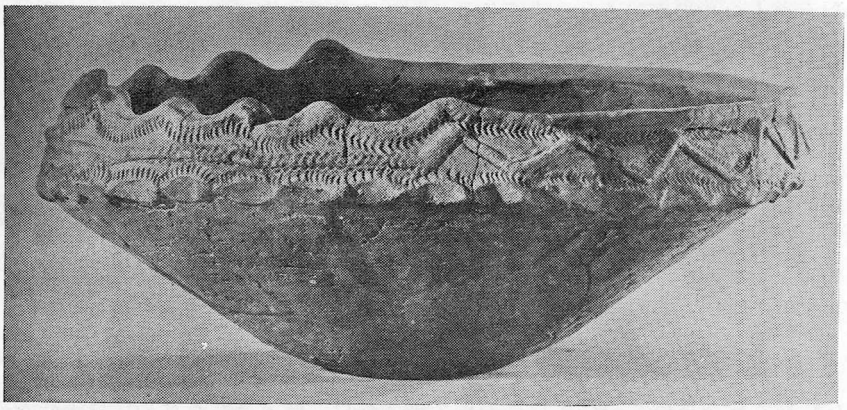

fig. 1　藤内1式土器（中期）

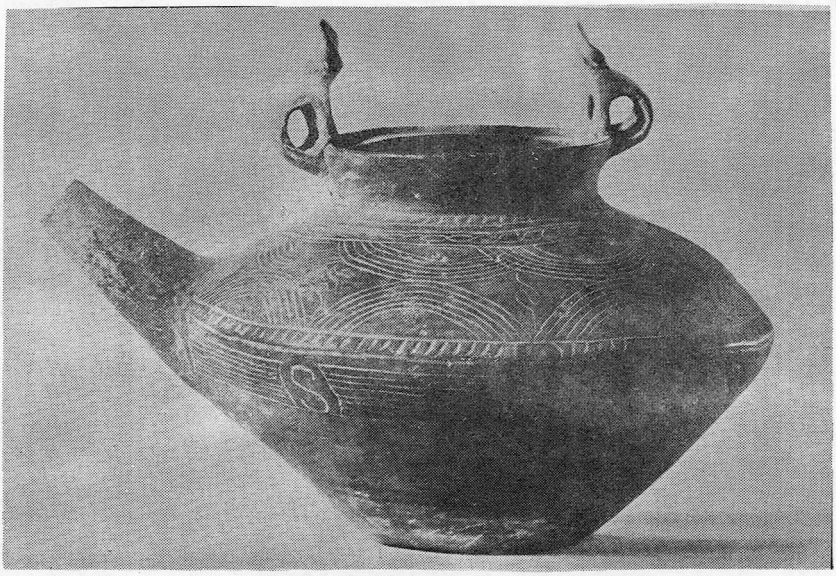

fig. 2　後期縄文式注口土器

fig. 3　新道式土器 煮沸具

fig. 4　新道式土器 煮沸具

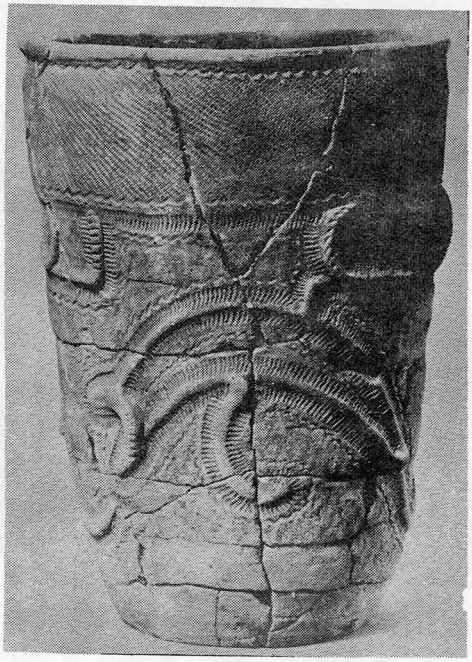

fig. 5　藤内1式土器 煮沸具

fig. 6　曽利１式土器（中期）

fig. 7　井戸尻11式土器
蒸し器状土器

fig. 8　曽利11式土器
蒸し器状土器

fig. 9　井戸尻11式土器
蒸し器状土器

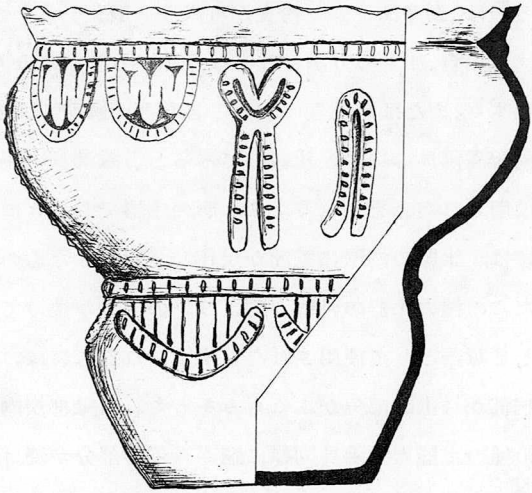

fig.10　蒸し器状土器断面図

中期になると、縄文式土器は各形式ともに装飾的なものとなり、先に述べたように複雑な突起や把手などが器体を飾るようになり、特に加曽利式、勝坂式や中でも馬高式にみる造形意識の強いものまでが現われてくるが、煮沸具として使用されたと推測される土器については、器体表面に縄文や粘土紐による浮文や、沈線文による装飾が加えられているにしても、さほど強い装飾性は感じられず、かえって粗雑な感じでさえある。 註）写真参照 fig. 6

この時期になると、早期・前期とは異り、土器の形式も長野県井戸尻遺跡からセットとなって出土した土器群にみるように、貯蔵用土器、煮沸用土器、供献用土器と各々その用途と機能に適した形態に分化していた。(注5)

またこの遺跡からは、武藤雄六も指摘しているように煮沸具の中から蒸器状の土器と仮定されるものが発見されている。(注6)

これは同時に発見されたパン状食品の炭化物(注7)があるところからみても、この時期の食品には単に煮炊きすることによって食用に供することだけではなく、澱粉質の食糧をパンのような塊状に加工した上で食用に供することがすでに行われていたのであろう。事実中期の住居趾からはきまって石皿が炉趾の周辺から発見されるのは、調理法として粉食が可成り一般化していたものと思われる。

なお粉食する場合、加工の方法としては煮沸することよりも、粉砕された食品をまるめて蒸すか、または蒸焼きにすることなどが適切であるように思われる。

今これを前記煮沸具の場合と比較してみると、煮沸具の場合は円筒に近い深鉢形の類が使用されたと思われる。この形の土器で煮炊きに用いられたと推測できるものには、土器の内壁に煮汁が炭化して附着したものが可成り発見されている。(注8) またこの種の土器の外壁、胴より下の部分が焼けて変色している。

これに対して蒸器として使用されたと推定されるものは、土器の下部が円筒状をなし、胴部から上の部分がふくらみをもち、口縁部が内反した形態をもっている。この種の土器も煮沸具同様に胴から下の部分が焼けて変色している状態は変らないにしても、内壁の炭化物の附着状態をみると、下部円筒状部分の

内壁以上に、上部ふくらみ部分の内壁に炭化物の附着が多いように見受けられる。(注9)

またこの種の蒸器状土器の内部を観察すると、下部の円筒状の上端、上部ふくらみをもった部分の下端、つまり土器のほぼ中央部にきまって段状の部分があり、簀を設置するのに適した個所が観察され、ふくらみ部の上端はおおむね平坦になっていて、蓋をすることを意識したと思われる個所が設けられているのが観察される。 註) 写真参照 fig. 7, fig. 8, fig. 9, fig.10,

現在までにこのような蒸器状土器出土の際、蓋・簀などを伴出した報告に接してはいないが、中期縄文式土器の底部に屢々網代状の圧痕がみられることから考えても、おそらく蒸器の内部に使用する簀の制作に関しては、当時の技術をもってしても容易なことであったと思われる。

煮沸用土器の基本的な形態はこの後も変っていないように思われる。もっとも縄文文化時代全般を通じて、土器の形態は深鉢形に端を発し、それを基本的な形態としながら、いくらかのヴァリエーションによる造形が行われたといえるであろう。

即ち縄文文化時代早期にはじまる煮沸という調理法が要請したと思われる機能とその成果は、単に原始時代のみならず、以後現在に至るまで連綿と受継がれ、煮沸という行為そのものには発展も発達もなかったと思われる。唯そこにあるものは炉の形式と、それに関連する器底の変化と材質の発展があったと云うことではなかろうか。

つまり縄文時代早期の直立させる煮沸具は、広い焚火形式の炉のために尖底であり、その後中期の石囲炉の時代になっても、恐らくは炉内に直立させたために次第に平底に発展して行ったのだが、しかしそれも胴の張りや口の拡がりに対しては可成り小さい引しまった底部であった。後期以後になって広い鍋底形の器底をもつようになってきたのは、炉内に直立させて煮炊きするのではなく、炉の囲石の上にかけて煮炊きするようになったためのものと思われる。

以上甚だ簡単ではあるが、煮沸具の形態が炉形、または食物との相関関係による機能の要請に従って、合理的な要素をもって成り立ってきたものであろうと考え、その私見を述べた。

いずれにしろ煮沸具は、各時代において多少の造形技法の巧拙はあるにしても、その発端においてすでに一定の基本的な形態が確立されていたと考えても良いのではなかろうか。

（注）1．川添　登『デザインとは何か』　59ページ。

2．江坂輝弥『縄文文化の発展』（世界考古学大系1日本）　44ページ。

3．　〃　　〃　　42ページ。

4．　〃　　〃　　42ページ。

5．藤森栄一『中期中葉の縄文土器群』（井戸尻）　96ページ。

6．武藤雄六『生活用具としての土器』（井戸尻）　143ページ。

7．武藤雄六『パン状炭化物についての2・3の実験』（井戸尻）　139ページ。

藤森栄一『池袋・曽利遺跡』（井戸尻）　42ページ。

8．武藤雄六『生活用具としての土器群』（井戸尻）　143ページ。

9．　〃　　〃　　143ページ。